

## 自閉症児を対象とした集団活動の意義についての検討

—臨床心理学的地域援助の視点から—

Meanings of Group Activity for Autistic Children:  
From the View of Clinical Psychology for Community Support

高橋 信幸・石倉 健二

Nobuyuki TAKAHASHI and Kenji ISHIKURA

### 要旨

学齢期の障害児の地域支援活動が広く行われ始めているが、佐世保市で行われた自閉症児地域療育事業として実施されたスイミングスクールにおいて、その活動の意義や目的を明らかにし、自閉症児とその保護者の地域生活を支援するための活動のあり方について調査・検討を行った。質問紙調査の結果、保護者は子どもが安心して楽しく過ごせる場を求めており、そこが子ども自身の興味・関心に応えたり、自閉症児の特性を踏まえた活動になるようなことが求められていることがうかがえた。またこうした活動を支えるボランティアの側では、ボランティア自身の学習体験になるように、自閉症児の特性やその教育・発達といったことについての基礎知識を身につける機会として機能させることが求められていると考えられた。そしてこうした自閉症児地域療育事業は、子どもや親の「心の問題発生予防」「心の支援」に貢献することが期待され、二次障害の予防や豊かな時間を過ごすための臨床心理学的地域援助として機能する可能性が示唆された。

### キーワード

自閉症児、集団活動、地域援助

### I 目的

平成14年度からの学校週五日制導入に伴って、障害をもった子どもたちが豊かな時間を過ごすための場作りが強調され始めており、学童保育や福祉センターや公民館等の地域関係機関がその役割を担っていることが報告されている(渡邊2001)。こうした状況を受けて、佐世保市内及び近郊においても障害児の学校外での活動の場作りを目的とした、地域ネットワーク事業が展開され始めている。ここでは、障害児とその保護者を中心としながら、幼稚園、養護学校、中学校、高校、高専、短大、大学など福祉教育やボランティアに関わる人たちが連携して活動を行っている。

学齢期の障害児の地域支援として山根(2001)は、「①乳幼児期から青年期まで継続す

る身近な相談支援サービス」「②障害特性に合わせた専門的リハビリテーションの提供」「③暮らす地域で社会とかわかり、参加する場の確保」「④家族の負担軽減のためのレスパイトサービスや短期入所の確保」の4つの必要性を指摘している。①については、平成8年に設けられた地域療育等支援事業のもとで、障害児・者を対象とした在宅支援に携わるコーディネーターがその中心的役割を担っており、②は専門医療機関や発達支援施設がその役割を担っている。③は学校だけでは足りない部分を地域の人や場が提供することが期待されており、保護者やボランティアなどがリードしている部分である。また④の取り組みは課題も多いが、短期入所施設や地域の通園施設でのレスパイトサービスの整備が始まりだしているところである。

本研究は、障害児のこうした地域支援の一環として、「③暮らす地域で社会とかかわり、参加する場」を作ることを中心的な目標にしている自閉症児とその保護者組織及びその支援グループを対象に、学校以外での集団の場作りの意義や目的を明らかにし、今後の活動を円滑に進めていくための方策について検討するものである。またこれにより、今後の障害児とその保護者の地域生活を支援するための活動のあり方について考察を行うことを目的としている。

## II 調査

自閉症児地域療育事業で行われた「スイミングスクール（仮称。以下“SS”と略記）」において意識調査を実施した。SSは、夏休み中に過ごす場の少ない自閉症児達に何かしら安心して出かけることのできる場を作ることを目的に行われてきたもので、2002年で4年目を迎える事業である。

調査実施年のSSは、夏休み中の毎木曜日（計6回）の13時から14時半まで行われた。内容としては、温水プール内で各人が遊具等を利用したプール遊びを行った。参加者は対象児10～20名、きょうだい児5名前後、学生ボランティア15～20名、教員ボランティア1～5名、事務局スタッフ1～2名、スイミングスクールコーチ4名となっている。

### 1. 調査目的

自閉症児地域療育事業の一環として実施されたSSの運営と活動内容についての課題、および参加することの意義や効果などを明らかにする。

渡辺（1999）は、障害児者の家族に対する支援プログラムについて10項目にわたる内容を示している。今回の調査は、SSを家族支援の側面を持つものと考え、その中から活動内容に適合する内容と思われる「情報の提供」「家族/介護者への教育」「カウンセリング」「レスパイト」「交通手段提供」「特別援助サービス（在宅ケア

や栄養関係の援助など）」「経済的援助」「レクリエーション」の8項目を調査の選択項目として設定する。

### 2. 調査対象

SSに参加した親の会会員30名、学生ボランティア28名、教員ボランティア7名。

### 3. 調査時期

2002年8月29日～9月14日

### 4. 調査方法

SS最終回終了時に手渡しによって配布し、郵送にて回収。

### 5. 調査結果

#### (1) 回収率

親の会会員21票（回収率70%）  
学生ボランティア17票（回収率60%）  
教員ボランティア7票（回収率100%）

#### (2) 親の会会員の回答

親の会会員、すなわち保護者の立場からの回答である。

##### ① 保護者の参加目的（表1）

SSへの参加目的を複数回答で回答してもらったところ、最も多かったのは「子どもがプール・水泳を好きだったから」で20名（95.2%）であった。次いで、「子どもを安心して遊ばせる場所がほしかったから」が18名（85.7%）、「他の家族と交流し、一緒に過ごせる場所がほしかったから」が12名（57.1%）、「自分（保護者）が息抜きできる場所がほしかったから」が10名（47.6%）であった。

##### ② 参加してよかったと感じた点（表2）

SSに参加して良かったと感じたものについて複数回答で回答してもらったところ、「子どもがプール・水泳を楽しむことができた」が最も多く21名（100.0%）であった。次に多かったのは「子どもを安心して遊ばせることができ

表1 保護者の参加目的 (複数回答) (N=21)

項 目	度数 (人)	%
子どもがプール・水泳を好きだったから	20	95.2
子どもを安心して遊ばせる場所がほしかったから	18	85.7
他の家族と交流し、一緒に過ごせる場がほしかったから	12	57.1
自分(保護者)が息抜きできる場所がほしかったから	10	47.6
子どもに言語能力や社会性を身につけて(あるいは向上して)ほしかったから	5	23.8
専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごせる場がほしかったから	4	19.0
子どもの水泳能力を発揮・向上させたかったから	2	9.5
子どもへのかかわり方について学ぶ場がほしかったから	1	4.8
自分(保護者)が何かをしている間に、子どものケアをかわってほしかったから	1	4.8
自分(保護者)へのカウンセリング、保健などについての情報がほしかったから	1	4.8
子どものケアや健康管理などについての専門的な情報がほしかったから	0	0.0
その他(「兄弟も楽しめる場だったから」「毎年楽しみにしているので」)	2	9.5

表2 参加してよかったと感じた点 (複数回答) (N=21)

項 目	度数 (人)	%
子どもがプール・水泳を楽しむことができた	21	100.0
子どもを安心して遊ばせることができた	19	90.5
自分(保護者)が息抜きをすることができた	12	57.1
他の家族と交流し、一緒に過ごすことができた	11	52.4
専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごすことができた	4	19.0
子どもに言語能力や社会性が身についた(あるいは向上した)	3	14.3
子どもの水泳能力が発揮あるいは向上された	2	9.5
自分(保護者)が何かをしている間に、子どものケアを替わってもらうことができた	2	9.5
自分(保護者)へのカウンセリング、保健などについての情報を得ることができた	1	4.8
子どもへのかかわり方について学ぶことができた	1	4.8
子どものケアや健康管理などについての専門的な情報を得ることができた	0	0.0
よかったと感じるものは特になかった	0	0.0
その他(「お風呂の際、シャンプーハットがなくても洗髪できるようになった」)	1	4.8

た」で19名(90.5%)、「自分(保護者)が息抜きをすることができた」は12名(57.1%)、「他の家族と交流し、一緒に過ごすことができた」が11名(52.4%)と続いている。

③ 活動で物足りなかったもの

今回のSSで物足りないと感じたものにつ

いて複数回答で尋ねたが、「物足りないと感じるものは特になかった」という回答が11名(52.4%)と最も多く、「子どもの水泳能力が発揮あるいは向上しなかった」「専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごすことができなかった」「子どものケアや健康管理などについての

専門的な情報を得ることができなかった」が2名(9.5%)と少数で挙げられているのみであった。

#### ④ 今後取り入れて欲しいもの(表3)

今後のSSにおいて取り入れて欲しいものについて複数回答で回答してもらったところ、「子ども向けレクリエーションの充実」が11名(52.4%)と最も多く、「SSまでの交通手段の提供」が8名(38.1%)、「子どものケアや健康管理などについての専門的な情報の提供」が4名(19.0%)と続いている。

#### ⑤ 今後の実施回数、時間等について

今後のSSの実施回数や実施曜日については、「今の回数(週一回)でよい」「今の曜日(木曜)でよい」とする回答が18名(85.7%)と最も多く、また実施時間の長さについても、「今の時間(90分)でよい」とする回答が18名(85.7%)と最も多かった。開始時間についても、「今の時間(13:00から)でよい」とする回答が16名(76.2%)と最も多かった。

#### ⑥ ボランティアについて

ボランティアの対応については、「特に要望はない」とする回答が9名(42.9%)と最も多

いものの、「自閉症児との関わりについてもっと学習してほしい」が7名(33.3%)、「活動に積極的参加してほしい」が5名(23.8%)、「もっと保護者と交流や情報交換をしてほしい」が4名(19.0%)などの要望が挙げられていた。

またボランティアとの連携については、「特に要望はない」とする回答が12名(57.1%)であったが、「その他」の要望が6名(28.6%)と多くみられた。その内容としては、ボランティアの名前や自分の子どもの担当者を知りたいとか、その日の様子について知りたい、その日のリーダーを知りたい、などむしろ運営上の問題点といえる指摘があった。

#### ⑦ 活動プログラムについて(表4)

活動プログラムについて複数回答で回答してもらったところ、「特に要望はない」とする回答は7名(33.3%)で、最も多いのは「自閉症の特性をふまえたプログラムを組んでほしい」とする回答で9名(42.9%)であった。また「何か一定の活動プログラムがあったほうがよい」とする回答も5名(23.8%)、「水泳がうまくなるようなプログラムを組んでほしい」という回答も3名(14.3%)あった。

表3 今後取り入れて欲しいもの(複数回答)

(N=21)

項目	度数(人)	%
子ども向けのレクリエーションの充実	11	52.4
SSまでの交通手段の提供	8	38.1
子どものケアや健康管理などについての専門的な情報の提供	4	19.0
子どもへの専門的なケアについて、家族に向けた教育や訓練	3	14.3
親や家族へのカウンセリングの提供	3	14.3
親や家族同士の交流の機会の提供	3	14.3
SS利用にあたっての経済的補助	3	14.3
親や家族の息抜きの機会の提供	2	9.5
取り入れてほしいと思うものは特になし	2	9.5
在宅ケアや、栄養指導などの援助サービス	0	0.0
その他(「地域の健常児との交流」「子どもに合わせて、泳げるような声かけ」「参加者名簿があると交流しやすい」「駅からバスがあると助かる」「アクアビクスをやってほしい」「一、二回でも療育相談や他家族との意見交換があるといい」)	5	23.8

⑧ スイミングプールに対する要望  
会場とコーチを提供していただいているスイミングプールへの要望は、「特に要望はない」とする回答が16名(76.2%)で最も多かった。

⑨ 事務局との連携について  
SS 事務局との連携については、「特に要望はない」が10名(47.6%)、「親の意見を集約する機会がほしい」が8名(38.1%)であった。

(3) ボランティアの回答  
ボランティアとして参加している学校教員と学生・生徒の回答である。

① 参加してよかったと感じた点(表5)  
SS に参加して良かったと感じたものについ

て複数回答で回答してもらったところ、17名(70.8%)が「子どものかかわり方について学ぶことができた」と回答し、次いで「子どもとうまく遊べることができた」と回答したのが12名(50.0%)と多く、また「他のボランティアと交流し、一緒に過ごすことができた」が10名(41.7%)であった。

② 活動で物足りないと感じたもの(表6)  
今回の SS で物足りないと感じたものについて複数回答で尋ねたところ、最も多かったのは「子どもの水泳能力を発揮させること、あるいは向上させることができなかった」が7名(29.2%)で、「物足りないと感じるものは特になかった」と「子どものケアや健康管理などに

表4 活動プログラムについて(複数回答)

(N=21)

項目	度数(人)	%
自閉症児の特性をふまえたプログラムを組んで欲しい	9	42.9
特に要望はない	7	33.3
何か一定の活動プログラムがあったほうがよい	5	23.8
水泳がうまくなるようなプログラムを組んで欲しい	3	14.3
特に活動プログラムを組む必要はない	1	4.8
言語・社会性がうまくなるようなプログラムを組んで欲しい	0	0.0
その他(「中学生以上についての対応を考えて欲しい」「プールの中よりも、着替えや待ち時間、移動などがとても大切だし、緊張する時間でもあるので、そうした時間のプログラムが大事だと思う」)	2	9.5

表5 参加してよかったと感じた点(複数回答)

(N=24)

項目	度数(人)	%
子どもとの関わり方について学ぶことができた	17	70.8
子どもとうまく遊ぶことができた	12	50.0
他のボランティアと交流し、一緒に過ごすことができた	10	41.7
保護者の息抜きの機会をつくることができた	8	33.3
子どもをうまくプール・水泳で楽しませることができた	8	33.3
保護者に替わって子どものケアをすることができた	5	20.8
専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごすことができた	4	16.7
子どものケアや健康管理などについての専門的なことを知ることができた	4	16.7
子どもに言語能力や社会性が身についた(あるいは向上できた)	1	4.2

についての専門的なことを知るができなかった」が6名(25.0%)、「専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごすことができなかった」「保護者に替わって子どものケアをすることができなかった」「保護者へのカウンセリング、保健などについての専門的なことを知るができなかった」が5名(20.8%)などの回答が多かった。

③ 事務局、担当教員への要望  
SS 事務局や学生ボランティアの場合は担当

教員への要望について複数回答で訪ねたところ、「自閉症児との関わりについてもっと教えてほしい」が14名(58.3%)と最も多く、同様のことが水泳のコーチの対応についても8名(33.3%)から要望があがっていた。

④ 活動プログラムについて(表7)

活動プログラムについて複数回答で回答してもらったところ、「特に要望はない」が最も多く15名(62.5%)であった。次いで、「自閉症児の特性をふまえたものにして欲しい」が6名

表6 活動で物足りないと感じたもの(複数回答)

(N=24)

項目	度数(人)	%
子どもの水泳能力を発揮させること、あるいは向上させることができなかった	7	29.2
物足りないと感じるものは特になかった	6	25.0
子どものケアや健康管理などについての専門的なことを知るができなかった	6	25.0
専門家・専門職員と交流し、一緒に過ごすことができなかった	5	20.8
保護者に替わって子どものケアをすることができなかった	5	20.8
保護者へのカウンセリング、保健などについての専門的なことを知るができなかった	5	20.8
他のボランティアと交流し、一緒に過ごすことができなかった	3	12.5
子供を安心して遊ばせることができなかった	2	8.3
保護者の息抜きの機会をつくるができなかった	2	8.3
子どもをうまくプール・水泳で楽しませることができなかった	2	8.3
子どもに言語能力や社会性を身につけ(あるいは向上)させることができなかった	2	8.3
子どもとの関わり方について学ぶことができなかった	1	4.2
その他(「専門家の先生がこない。養護学校の先生はなく、発達障害の先生が絶対に必要」)	1	4.2

表7 活動プログラムについて(複数回答)

(N=24)

項目	度数(人)	%
特に要望はない	15	62.5
自閉症児の特性をふまえたものにして欲しい	6	25.0
言語・社会性の改善に主眼を置いたプログラムを組んで欲しい	3	12.5
水泳がうまくなるようなプログラムを組んで欲しい	1	4.2
特にプログラムを組む必要はない	0	0.0
その他(「途中で休憩が必要なのは? 休憩と泳ぐメリハリがあるといいと思います。ずっと入りっぱなしは子どもにとってもきついです」「自閉症との関わり方や水泳の指導について、具体的にこうしたらよい、これをしてはいけないということを教えて欲しい」「自閉症児の人たちのことを考えた無理のないもの」)	3	12.5

(25.0%)であった。

⑤ 事務局とボランティアの連携について

「特に要望はない」とする回答が15名(62.5%)と最も多いが、「ボランティアの意見を集約する機会がほしい」とする回答も5名(20.8%)みられた。

6. 考 察

(1) 保護者の立場から

保護者の参加目的としては、「子どもがプール・水泳を好きだから」「安心して遊ばせる場所」の二つの回答が圧倒的に多く、また「他の家族と交流し、過ごせる場」「息抜きできる場」という回答が次いでいる。その一方で、「水泳能力」「関わり方」「ケアの交代」「カウンセリングや保健」「専門的情報」といった回答は極めて少ない。こうしたことから、保護者の参加目的としては、教育的・発達のなものよりも、子どもの興味・関心に応じて、安心して過ごすことのできる場所を求めていることが明らかにうかがえる。

また参加した結果、「子どもがプール・水泳を楽しむことができた」「安心して遊ばせることができた」という評価が圧倒的に多く、「息抜きをすることができた」「他の家族と交流し、一緒に過ごすことができた」という回答もそれに次いでいる。こうしたことから、保護者の期待に応えた活動が行われていることがうかがえる。

今後に取り入れて欲しいものとして、あまり多くのものはなかったが、「子ども向けのレクリエーションの充実」はほぼ半数の人が要望している。レクリエーションの充実とは、子どもが楽しく過ごすための工夫であり、参加目的の上位二つをさらに補完するための機能が求められていると思われる。「その他」のものは回答数としては一つであるが、幾つかの重要な指摘がなされている。「参加者名簿」「意見交換会」は運営上のちょっとした工夫の問題であり、「子どもにあわせた声かけ」はボランティアへ

の事前教育の問題、「地域の健常児との交流」は障害児の地域生活ということを考える場合には重要な視点である。これらのことは、今後の会の運営に重要なものと思われる。

ボランティアの対応については、「特に要望はない」とする回答は半分を下回っており、課題は多くあるものと思われる。「自閉症児との関わりについてもっと学習して欲しい」という要望が最も多く、「活動への積極的参加」が次いでいる。「その他」も含めた他の回答も含めて、ボランティアへの事前教育や運営上の工夫が求められるところである。同様に、ボランティアとの連携については、「その他」に示されている回答を含め、ボランティアと保護者の個人的なつながりを作るような事務局のあり方が求められている。

活動における「プログラム」については、「自閉症児の特性をふまえたプログラム」の要望があるが、これも子どもが楽しく過ごすための工夫を求めているものと思われる。それと同様に目を引くのは、「その他」で示されているように、「プールの中よりも、着替えや待ち時間、移動」についての配慮が求められているが、運営上では見落とされがちな部分であり、事前教育と合わせて考えていかなければならない部分である。また事務局に対しては、「親の意見を集約する機会」を求める回答が4割近くあり、準備会議や実施途中での事務局との協議などがやや不十分ではなかったかという懸念が残るところである。

こうしたことから、保護者としてはまず子どもが安心して楽しく過ごせる場を求めており、そこに子ども自身の興味・関心に応えたり、自閉症児の特性を踏まえた活動になるようなことが求められていることがわかる。さらにそこが、保護者同士の交流や息抜きの場となることも求められている。そして、ボランティアに対しては自閉症児との関わりについて学習することと積極的な活動や保護者との個人的なつながりも求めていることがうかがえる。

## (2) ボランティアの立場から

参加してよかった点としては、「子どもとの関わりについて学ぶことができた」という学習的側面が最も多かった。次いで「うまく遊ぶことができた」「他のボランティアとの交流」があげられているが、ボランティア自身の楽しかった体験や交流の体験が示されており、参加児に対する視点だけでなく、こうしたボランティア自身に対する視点が運営上には必要であることがうかがえる。

「物足りない」と感じるものは「特になかった」という回答もあるが、「子どもの水泳能力の発揮・向上」「専門的なことを知る」「専門家・専門職員と交流」など教育・発達の側面についての要望が少ないながらも見られたことは、保護者の立場とやや異なる所である。そうしたことが前提にあるためか、事務局に対しては「自閉症児との関わりについて教えて欲しい」という要望が最も多く、活動プログラムについても「自閉症児の特性をふまえたものにして欲しい」という声が上がっていた。

こうしたことから、ボランティアに対してはボランティア自身の学習体験になるように、自閉症児の特性やその教育・発達といったことについて基礎知識を身につける機会として機能させることが求められていると考えられる。

## Ⅲ まとめ

### 1. 事業の意義と今後の展開

今回調査を行った SS は、「子どもがプール・水泳を好きだから」「安心して遊ばせる場所」「他の家族と交流し、過ごせる場」「息抜きできる場」という保護者の期待に応えることができているという結果から、山根(2001)の示すところの「暮らす地域で社会とかわり、参加する場の確保」として十分な機能を果たしていると考えられる。また、大きな課題として残っているのは「地域の健常児との交流」であり、検討の必要性がある。さらにボランティア学生に対する教育や参加者同士の個人

的な交流など運営上の工夫が必要な部分はいくつかあるものの、解決可能な課題と考えられ、今後の活動における改善が必要である。

### 2. 臨床心理学的地域援助の視点から

これまで、発達に障害のある子どもに関する援助は、障害を持つ個人に対する援助が中心であった。石倉ら(2002)も、そうした子ども個人の発達を中心とした集団療法を行ってきた。しかし、簡単に治癒されない症状を背負っていかねばならない人々に対する援助は、地域ぐるみで支援していく臨床心理学的地域援助が効果を持ってくと平川(1995)は指摘している。臨床心理学的地域援助は、「地域社会で生活を営んでいる人々の、心の問題の発生予防、心の支援、社会的能力の向上、その人々が生活している心理的・社会的環境の調整、心に関する情報の提供などを行う臨床心理学的行為」(山本2001)と定義されている。これによれば、臨床心理学的援助は心理アセスメントや心理相談にとどまらず、地域を土俵に専門的援助をしていこうとするものである。

こうした臨床心理学的地域援助として今回の自閉症児療育事業を考えた場合、援助の対象者は地域で生活している自閉症児とその家族であり、また地域で生きる人々である。参加目的として多かった「安心して遊べる場」の提供は、自閉症児にとって制限されがちな休日に出かける場所のレパトリーを増やすことで、子どもの「心の問題の発生予防」や「心の支援」に貢献することが期待でき、いわば子どもの二次的障害の予防や豊かな時間を過ごすための支援といえる。またこの SS が保護者の「息抜き」や「交流」の場となっていることは、保護者の「心の問題の発生予防」「心の支援」にも貢献することが期待できる。「社会的能力の向上」は、発達障害児の場合、ケアや訓練がそれに相当するものと言われているが、今回そうした心の発達促進が子どもにどれだけでもたらすことができたかは不明であった。また問題を抱えた人を含む環



境に働きかけることで問題の解決を促進するという「心理的・社会的環境の調整」ということで、こうした事業を実施する過程で、幼稚園やスイミングプール、多くの学生ボランティアや学校教員が関わったということそのものが、何よりもこの「環境調整」の成果であったと思われる。そして最後の「情報提供」については、ボランティア教育に代表される参加者に対するものや地域の健常児との交流などの指摘にみられるような地域の人々に対するものなど、幾つか課題を残している所である。

自閉症児に対する臨床心理学的地域援助という考え方は、まだ始まったばかりである。今回の事業内容で成果が十分な部分と不十分な部分があったが、今後、こうした新たな視点からの援助のあり方を検討し続けていくことが必要である。

#### 付 記

本研究は、2002年度長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科共同研究費によって行われたも

のであります。本研究が実施できたことに対して、関係各位に感謝申し上げます。

#### 文 献

- 1) 渡邊和弘 (2001) : 休日・放課後における障害のある子どもの地域活動促進の展望—東京都の先進例をふまえた全知P連の地域活動促進・ボランティア養成事業を通じて—。発達障害研究, 23(2), 14-24.
- 2) 山根律子 (2001) : 学校と地域福祉サービスとの連携。発達障害研究, 23(2), 1-5.
- 3) 渡辺頭一郎 (1999) : 心身障害児者の家族支援をめぐる現状と課題。ソーシャルワーク研究, 24(4), 279-285.
- 4) 石倉健二, 岡嶋一朗, 鬼塚良太郎, 他 (2002) : コミュニケーションの困難な子どもたちに対する集団心理療法。発達臨床心理研究, 7, 15-26.
- 5) 平川忠敏 (1995) : 地域における障害児・者の療育活動。山本和郎・箕口雅博・久田満・他編著, 臨床・コミュニティ心理学。ミネルヴァ書房。
- 6) 山本和郎 (2001) : 臨床心理学的地域援助とは何か。山本和郎編, 臨床心理学的地域援助の展開。培風館。